市古貞次著

中世小說の研究

東京大學出版會

著者略歴

明治 44 年生

昭和 9 年東京大学国文学科卒

現在　東京大学文学部教授

主要著書

未刊中世小説解題（楽浪書院）

中世小説（至文堂）

日本文学史概説（秀英出版）

現　住　所

東京都中野区江原町 1の32の5

中世小説の研究

1955年12月10日　第1刷発行
1968年 6 月10日　第5刷発行

検印廃止　　定価 1500 円***

著　者　市古貞次（いちこ ていじ）

発行者　福武直

発行所　財団法人　東京大学出版会
東京都文京区本郷 東大構内. 電話(811)8814 振替東京 59964

精興社印刷・矢嶋製本　　8032

はしがき

中世小説の研究は明治に入って新たに開拓された分野である。明治二十四年今泉定助・畠山健兩氏によって、「御伽草子」二十三篇が活字本として刊行されたのが、研究者の注意を喚起したはじめであらう。前年に出た關根正直博士の「小説史稿」にも御伽草子に關する説明があったが、御伽草子の意義を一層明確にし、十篇の新資料の紹介を行ったのは、萩野由之博士の「新編御伽草子」(明治三十四年。その前に帝國文學に連載)であった。次いで、明治四十一年には平出鏗二郎氏の「室町時代小説集」が出て、作品十篇の飜刻が行はれたが、續いて翌四十二年には「近古小説解題」が刊行された。氏の祖父は名古屋の國學、平出順益であって、その「物語草紙解題」(延齡渉獵書目)は幕末におけるこの方面の研究書として逸することのできないものであったが、この祖父の著述と豊富な藏書とに惠まれた氏は鎌倉時代から江戸初期にわたる物語草子二百三十三篇に就いて、ここにすぐれた解題を殘したのである。なほほぼ時を同じうして、平出氏の親友で、「近古小説解題」の整備を援けた藤岡作太郎博士も、東大で室町時代の小説を講じて居り、その講義筆記が博士の歿後「鎌倉室町時代文學史」の中に收められてゐる。このやうに近代國文學研究史においても高い地位を占めると考へられる兩氏の手によって、明治の末年に中世小説の研究が推進されたのは、極めて注目すべきことであった。前者は個々の作品を網羅した基礎的研究であり、後者は全體の本質把握において大いに見るべきものがあったといはなければならない。

かうして明治年間に一往の基礎がきづかれた中世小說の研究は、大正年代には見るべき業績に乏しかったが、昭和に入って島津久基博士の諸研究が發表されるに及んで、再び活潑となるのである。昭和二年刊行の「近古小說新纂初輯」は「近古小說解題」にも見えない稀覯書を中心として編纂されたものであるが、單に稀覯書の飜刻といふにとどまらず、この方面の作品にはじめて懇切周到な注釋を加へたといふ點で意義がある。さらに各作品に加へた考說は三百頁に及ぶ勞作であって、博引傍證のうちに作品研究の方法、體系を示してゐるところに、大きな價値があると思ふ。なほ博士には「御伽草子論考」(「國語と國文學」昭和六年十月號)「近古小說選」(昭和二年)や「日本文學大辭典」の解說があり、何れも昭和初期における最もすぐれた業績であった。

昭和十年以降は野村八良博士の「室町時代小說論」が出たが、どちらかといへば資料的研究に重點が置かれたといってよい。笹野堅氏の「室町時代短篇集」もそれであるが、特筆すべきは、横山重氏・太田武夫氏等の「室町時代物語集」五冊の刊行であらう。諸家に祕藏される作品を博搜・蒐集して精確に飜刻された功績は頗る大きかった。また柳田國男氏・筑土鈴寬氏等の民俗學の方面からの研究も昭和に入って盛んであり、寄與することが大きかったし、後藤丹治博士の史料に基く研究あるいは影響關係の闡明も、研究を促進させるものとして、見のがすことができない。

筆者も昭和九年東大卒業以來、この研究に從ひ、「書誌學」に連載したものをまとめて昭和十七年「未刊中世小說解題」として刊行したが、本書は昭和二十一・二年における講義草稿をまとめ、さらに二十四年に補訂を加へたものである。その後、新資料の探索も諸家によって續けられて居り、また歷史學あるいは民俗學の側からのすぐれた研究も出て居るが、本書では、種々の事情から、それらの一部分を追記として補ったほかは、訂正を要す

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ると認められる幾つかの語句を改めるにとどめざるを得なかった。さういふわけで、なほ不満な箇所も少くないけれども、何れにしても過去十數年の間、主力を注いで來た研究の成果であって、筆者としては一つの到達點を示したつもりである。したがって讀者諸賢の忌憚ない批判・教示をいただければまことに幸であり、また、もしこの方面の研究に多少なりとも寄與するところがあれば、筆者にとっては望外のよろこびである。

かうして貧しいながらも一書を成すに當って、東大國文學科入學以來、一方ならぬ御指導をたまはった故藤村作先生並に久松潛一先生につつしんで感謝の微意を捧げたいと思ふ。また直接にあるいは御著書を通して數々の御教示に與った故島津久基先生、笹野堅先生をはじめその他の諸先生、諸先輩に對し、さらに貴重な典籍の披閲を御許し下さった方々、圖書館・文庫の各位に對して、心から御禮申上げたいと思ふ。

昭和三十年十月二十五日

市古貞次

終りに本書は文部省研究成果刊行費補助金によるものであることを銘記する。

目次

はしがき

序説……一

1 中世小説の範圍……一

2 御伽草子の意味……二

3 中世小説の史的背景……二五

4 中世小説の分類に就いて……六六

第一章 公家小説……七一

1 擬古物語と公家……七一

2 戀愛談……七六

3 繼子物……九〇

4 歌物語と歌人傳説……一〇六

5 その他……一二三

第二章　僧侶小説（宗教小説）……一二九
1　僧侶と文藝……一二九
2　兒物語……一三〇
3　破戒僧の失敗談……一四三
4　發心遁世談・懺悔物……一四六
5　本地物……一五八
6　高僧傳記小説……一八一
7　緣起物……一八四
8　説教法談物……一八五
第三章　武家小説……一八七
1　武士と文藝……一八七
2　幸若舞曲……一九八
3　怪物退治談……二一二
4　源平時代の小説……二二三
5　御家騒動物・復讐談（創作物及び地方傳説物）……二五一
第四章　庶民小説……二六七

1 中世に於ける庶民的文藝……二六七
2 笑話・寓話……二八八
3 求婚談・戀愛談……二九七
4 立身出世談……三〇三
5 祝儀物……三〇六

第五章 異國小說……三一五

1 日本文學と異國趣味……三一五
2 外國小說……三一九
3 異鄕小說（理想鄕を描いたもの）……三二九

第六章 異類小說……三四七

1 異類小說の出現……三四七
2 怪婚談……三五二
3 歌合物……三六三
4 戀愛物……三六五
5 軍記物……三六八
6 遁世物その他……三七七

第七章　中世小説の諸問題……三八三
1　中世小説の作者……三八三
2　中世小説に於ける人間の問題……四〇二
3　中世小説の特質と史的位置……四一四
附　中世小説年表稿〔自建武至元和〕……四二九
明治以後刊行中世小説書目……四五五
索　引……四六七

序　説

1　中世小説の範圍

日本文學史の時代區分は、今日さまざまに論ぜられてゐる。その中で最も問題にせられてゐるのが中世であって、その範圍に關しては、人によってかなりな差異がみられる。從って中世小説についても種々の見解が成り立つことであらうが、私は日本の物語小説の展開の上から考へて、これを規定したいと思ふ。

日本小説史の時代區分については、從來概して文學史のそれに從ってをり、特に注目すべきものを見ないが、三期乃至四期に分つのが妥當ではないかと考へる。すなはちその起原の問題はしばらくおくとして、物語の祖とよばれる竹取物語あるいは伊勢物語・大和物語の成立したころ（八六〇年―九〇〇年）から、いはゆる物語文學が擬古物語に墮して分裂・崩壞してゆく鎌倉時代の末（一三三〇年ごろ）まで、およそ四百五十年を古代とし、南北朝から德川家康が江戸幕府を開いた慶長初年（一六〇〇年ごろ）までのおよそ三百年を中世とし、さらに江戸開幕から明治初年まで約二百七十年間を以て近世とみるのである。

また、右の區分を一層まとめて、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一　古代（物語文學）　八六〇年―一三三〇年
二　中世（草子文學）　一三三〇年―一八七〇年
三　近代（小説）　一八七〇年―

といふやうに、三期に分って考察することも可能であらうが、ここではしばらく前者に從って、中世小説を論ずることにしたいと思ふ。

2　御伽草子の意味

前節において、私は中世小説を、南北朝から江戸初期に至る間に制作せられた作品といふやうに規定した。ところが、一方文學史上の術語として「御伽草子」（御伽草紙）といふ名稱が用ゐられてをり、ほぼ同じ時代の短篇小説の汎稱として、今日ふつうに認められてゐる。そのやうな現代の學界に一般的に採用されてゐる名稱を、何故ここに採らなかったかについては、その理由を明かにしておく必要があらう。

そこでわれわれは、御伽草子といふ成語が何時ごろから用ゐはじめられ、どのやうな意味をもってゐたか、その語の由來・沿革を明かにし、その上で現在行はれてゐるこの語の用法が果して妥當であるか否かを、考へなければならない。

先づ順序として、明治以後の學者の説くところを顧みることにしよう。關根正直の「小説史稿」は明治二十三年（一八九〇年）の刊行で、日本小説史の權輿と目すべき歴史的意義をもつ著述であるが、同書の「室町將軍の時

代」をみると、

文正草子・梵天國・物草太郎などいふ例の御伽草子をも、共に淨瑠璃節に語る事となりにきとや。

と述べてゐる。例、のの二字は、世間周知の、あの、といふやうな氣持であらうかと察せられるのであり、江戸時代にまとめて出板書肆から板行され、明治二十四年に活字本二冊（今泉定助・畠山健校訂）となった二十三篇をさすやうに思はれるが、さらに氏は次の「江戸將軍の時代」を十一項に分ち(一)物語……)、その(五)を御伽草子とし、次の如く説明してゐる。

當時代の御伽草子には、猿蟹合戰、桃太郎の話し、又花咲せ爺、兎の仇討、さては鼠の嫁入などいふものありき。いづれも古くは繪卷物にて有けんを、後に鏤版して、册子となしゝ物ならん。さて鼠の嫁入といふ繪草紙の事は、中山三柳が醍醐隨筆に見えたれば、寛文（二百廿年程）以前、既に行はれしにや。

このやうに述べてゐるところから推察すると、御伽噺、童話の書といふくらゐの意味に廣く解してゐるもののやうである。また同書には、この著述に關しての坪内逍遙の手翰が附載されてゐるが、その中の「御伽草子」の項に、

西洋にては、此類を「フヘアリ。テールス」（仙話）といふ。重に仙女仙兒仙人等の、或は善童女を救ひしこと、或は善人を助けしことを語る。中には唯譯もなく無邪氣なるもあり。何時頃より行はれしものか知らず。……我國の御伽草子は、むしろ「フヘーブル」（寓言）に近かるべきか。

とあって、ほぼ同様な意味であるらしい。「黄金丸」（明治二十四年、巖谷小波作）に對する讀賣新聞評（「少年文學史」上による）に、

世に草册子廢れてより評者が目に殘れる稚文學の極樂園は魯文が叟のものされし猫の草紙の畫樣や名殘なりけん、それより後は幼童が御伽草の根は絶えて、「よみほん」といふ老幼相通の名も小說と元服改名し、年々歲々の新版おしなべて青年のお伽草紙となり、十中八九は戀といふねびたる情を畫き、若くは心理哲學などやうの、むね〳〵しきことを寫せるが多くなれりける。

とあるのも、お伽のための本といふくらゐの意味らしい。（なほ小波は明治二十六年に新お伽草紙を出してゐる。）

萩野由之編「新編御伽草子」（明治三十四年刊行、その前に帝國文學に連載された）は、室町から江戸へかけての物語、舞草子十篇を集めて、誰かが右の書名を附けておいたものを、そのまま紹介・飜字したものであるが、そのはしがきに編者は、「御伽草子は、短篇の草子物語二十三種の惣名なり。」といひ、南北朝ごろから德川初世までの間にできた由を記してゐる。かうして明治年間にはいはゆる二十三篇を總括した叢書名として解せられてゐたが、「新編御伽草子」や、大正初年に刊行された有朋堂文庫の「御伽草紙」（藤井紫影校訂）に、二十三篇以外の類似の作品をも併せ收めて以來、さういふ類似のものをも御伽草子と考へるやうになった。昭和六年までに現れた諸家の見解は島津久基博士の「御伽草子論考」[1]にほぼ盡されてをり、島津博士はそれらの諸見を勘案せられた上で、「大體、御伽草子を鎌倉末から江戸初期に亙る童話味を帶びた通俗小說」とし、また「概しては無論、御伽草子を室町時代の小說の汎稱とする事は決して不當ではない」と述べてゐる。さうして島津博士によって代表されるかういふ解釋が、現在もふつうに行はれてゐるのである。

然るにその後、笹野堅氏は「御伽草子名義考」（「國語と國文學」昭和七年九月號所載）及び「室町時代短篇集」の御伽草子攷において、從來の所說が內容に重きを置いて御伽草子を考へたのに對し、その行はれた書物の外形に

重點を置いて、新たな觀點から注目すべき見解を示された。すなはちかの御伽草子二十三篇が室町時代から江戸時代へかけて盛んに作られた奈良繪本の體裁を摸して板行したものであることに著目して、

御伽草子の名は、まさに御伽に用ゐられた草子、御伽の草子の意味であつたであらう。それも上流の婦女童幼の御伽の草子として、それにふさはしい內容をもつたものが、必然的に奈良繪本の體裁を備へたものであらう。

と述べ、御伽に用ゐられた草子といふ事を主張されてゐる。だがその原據は異なるにしても、結論としてこれを室町小說の汎稱とすることは、在來の說とさして變りがない。

この笹野氏の見解とは別に、しかし氏の著眼點を一層發展させ徹底させたかたちの研究が、國史學の側から提出された。桑田忠親氏、高柳光壽氏の論文がそれである。特に桑田氏の研究は「大名と御伽衆」（「國史學」「國語國文」等に揭載されたのを一册にまとめられたもの）に集成され、豐富な史料を引用した精緻な論考である。兩氏の所說は、要するに戰國時代から江戸時代にかけて、大名の側近に仕へた御伽衆の史料的考察から出發したものであって、御伽草子の御伽をこれと關聯せしめて考へ、御伽の席でよまれた草子、御伽のために作った草子を御伽草子といひ、從って本來の御伽草子は婦幼のためのものではないとするのである。さうして御伽衆の語ったところは武邊咄や怪異談が多かったと思はれることを文獻によって實證し、たとへば天正記の如き軍記が正に御伽草子なのであり、あるいは監物草子や二人比丘尼、あだ物語等のいはゆる假名草子をもそれであるとする。かくて文正草子以下の二十三篇の如きは御伽に用ゐられたといふ學術的根據は少しもないと述べてゐる。

このやうにして、一旦學界の定說であるかに考へられた、御伽草子を室町小說の汎稱となす見解は、現在甚だ動搖してゐるといふべきであるが、次に私見を述べてみようと思ふ。

およそ日本の小説史を論ずる者は、平安時代から鎌倉時代へかけての小説を、物語若しくは物語文學（鎌倉時代のを擬古物語といふ事もある）と稱し、南北朝より江戸初期に至る短篇小説群を御伽草子と名づけ、江戸時代の諸種の小説を假名草子、浮世草子、讀本、合卷、さては赤本、黑本、青本、黄表紙、洒落本、滑稽本、人情本等に分つのを通例とする。かういふ稱呼は、あるいは作品の性質、內容に基き、あるいは創作目的により、あるいは書物の體裁、表紙、裝釘に因む等々、そのよって來るところはさまざまであって、そこに何等の一貫した態度、方針が認められない。私はむしろこれらを一つの秩序ある體系の下に位置せしめるべきだと考へるが、一方右に揭げたやうな稱呼は、久しきに及んで言ひ慣らされ、われわれの耳に親しいものであって、容易にこれを棄て難い氣持も强く、また從って一般に通じやすいし、さらに名は體を表すといったていの便宜をも否定することはできない。特に江戸時代などにおける廣義での小説界の實狀は、かうした種々雜多な名稱を存置せしめなければならぬ程に、複雜多岐にわたってゐたことをも、認めざるを得ないのである。けれども、さうした慣習になづむ安易な氣持に引きずられて、全く再檢討を加へることなしに、そのまま放置することも、また決して當を得たものとはいひ得ないし、研究を促進する所以でもないであらう。

一體、われわれが國文學上の術語として、ある名稱を採用しようとするにあたっては、少くとも二つの態度があると思はれる。一は歷史的な稱呼を廢して、一定の識見もしくは體系をもって新たな名稱を附與しようとするのであり、他はなるべく歷史的な、すなはち古くから代々言ひ傳へられて來た、いはば代名詞的な、通有性に富む名稱、なるべくならば當時そのやうに人々から呼ばれた名稱を生かして用ゐようとする態度である。前者は整

然たる體系を具へるに至ることもあらうし、新鮮な感じを與へるのも事實であるが、ややもすると形式に墮しやすく、透徹した史觀を有するのでなければ、失敗に終る危險がすこぶる多い。かつそれぞれの名稱が一個人の新たに名づけたものである場合には、直ちに他の研究者に理解納得させ得ないといふ惱みもしばしば存するであらう。かくして前述の如く、學術上の用語は、學界全般に適用すべき公的な性格をも帶びてゐるのであるから、現在われわれは便宜的に兩者を併用してゐるわけであるけれども、なほさうした場合にあっても、一つの術語、名稱の歷史的な意義・用法を十分に察知し、果してその語が術語として適格なりや否やを熟慮する手續きを怠ってはならないであらう。

伽・御伽といふことばは、文獻の上では、鎌倉初期からあらはれてゐるやうである。「無名草子」に女房七八人が集まって、

1　こよひは御とぎしてやがてゐあかさん、月もめづらし。

と言ひ合ってゐる所がある。「無名草子」は建久七年（一一九六年）以後、建仁二年（一二〇二年）以前の成立と認められるから、これが管見の範圍では、御伽の最も古い用例である。續いて正嘉元年（一二五七年）の「私聚百因緣集」卷九〔十八〕高野ノ林慶上人僞ニ語妻一事の中の上人のことばには次のやうにある。

2　年深ク成テ行ク儘ニ傍モサビシク觸レ事タツキナク覺ユル。指有ン人ヲ語ヒ世ノトギニモ爲バヤナンド思ナリ。其ヲ取ランニハ痛ク年若カラン人ナンドハ惡カリナン。物ノ思遣リ有ルラン程ノ人忍ニ尋ネテ我トギニサセ給ヘ。

とあり、また文永八年（一二八五年）以前、鎌倉初期から中期にかけて成立したと推定される擬古物語にも、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com